

二〇〇九年度

頌栄女子学院中学校

入学試験問題（第一回）

受 験 番 号

国 語

《配 点》 一〇〇点

《試験時間》 四〇分

《注 意 事 項》

- 一 合図があるまで、これを開いてはいけません。
- 二 問題は14ページの冊子になっています。答えはすべて解答用紙に記入して下さい。解答用紙は一枚で、この中に折りこまれています。最初によく確認し、ぬけているものがあつたら、手をあげて申し出て下さい。
- 三 試験が始まったら、解答用紙の左にある欄に、氏名と受験番号（算用数字で）を正しく記入して下さい。受験番号は、問題表紙にも記入して下さい。
- 四 解答用紙の*印の欄には、何も記入しないで下さい。

※字数指定のある問いでは、特にことわりのない限り、句読点等の符号も一字分と数えます。

一

著作権上の都合により文章・設問の掲載を省略しました。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題文中の※は、終わりに注があります。)

※¹ オール木成^{きなり}に入ったという事で、私はピアノをやめることにした。毎週火曜日の四時からレッスンだったが、オール木成の練習は毎日六時ごろまであるから行けなくなつたのだ。

でもそれは、ただお母さんを納得^{なつとく}させるための言い訳だ。オール木成の中でも習い事をしている子は何人もいる。※² やさおに言つて、決まった時間に帰る子もいるし、休日に曜日変更^{へんこう}した子もいる。

だからオール木成に入ったことと、習い事をやめるという事は、※³ イコールではない。でも、初めのミーティングのときに、やさおはこう言つた。

「練習は必ず出ること。病氣、けが以外での欠席は原則的に認めない」

実際このひとことで何人かは習い事をやめた。お母さんたちも、学校の行事ということで、案外簡単に習い事をやめさせてくれたみたいだった。そう、大人なんて結局なんだっていいのだ。学校から帰ってきて、すぐにテレビを観たりゲームをしたりしないで、^① ためになる「何か」をしていれば満足なのだ。

私はこれが絶好のチャンスとばかりにオール木成の持ち出して、ピアノをやめることを堂々と言つた。するとお母さんは、拍子^{あひら}抜けするくらいあつけなく了^{りよう}承^{しょう}してくれた。こんなだったらもつと早く言えばよかった、と後悔^{こうかい}したくらいだ。

私はピアノが大きらいだった。ピアノというより、ピアノの練習がいやでしかたなかった。月曜の夜のあのあせり。あの感じ。でもどうしても練習をする気になれないもどかしさ。

私はみどりちゃんのことを考える。みどりちゃんと私は、同じピアノ教室に通つていて、その教室で春に発表会があった。市内の同じ系列のピアノ教室の生徒が集まつて、地元の文化会館で行われた小さいものだったが、私は案^あの定^{てい}「練習をする」というセンスがまったくなく、いつまでたつても上達しなかった。私の弾^ひく曲は、十分実力の範囲^{はんい}内の曲だったがし、時間は十分すぎるほどあつた。

にもかかわらず、いつまでたつてもちつとも上達しない私に、先生はあきれかえりながら、最終手段として「補習」という、思いもかけなかったとんでもない隠^{かく}し技^{わざ}を提示してきた。

火曜日のレッスン日以外に、なんと日曜日まで特別にレッスンするというのだ。もちろん、発表会までの期間限定だし、これは先生の好意であつて無理に行かなくてもいいのだけれど、わざわざ先生が自分の時間を割^きいてまで教えてくれるというのに、行かないわけにはいかなかった。お母さんは先生に、申し訳ない、はずかしい、感謝します、と深々と頭を下げた。でも、私は腹立たしかつた。せっかくの休みにレッスンに行くなんて、まったくばかげている。本番になればどうにかするし、今までの経験からすると、きっと私は三日くらい前から猛^{もう}練習^{れんしゅう}をして、なんとか弾けるようになるはずなのだ。

それにこの補習は私のためじゃない。本番で先生が恥^{はじ}をかかないための補習レッスンだと思えなかつた。

私はしぶしぶとレッスンに行き、うんざりしながらみどりちゃんに、そのことを告げた。みどりちゃんは、^② 同情^{どうせい}とも哀^{あは}れみとも□□□□変な表情をして、

「大変だね」

とひとことだけ言つた。

しかし、それからしばらくたつたある日、みどりちゃんは私に、

「うらやましいよ」

とポツリと言つたのだ。

「えっ、何が」

「ピアノ。レッスン日以外にも、先生から教えてもらえるなんていいなあ……」

私は自分の^Aを疑つた。

「なんで? なんでなんで。だつて無理やりやらされてるんだよ。あまりにも下手だから、しょうがないからやつてるんだよ。先生だつて本当はイヤイヤなんだよ」

「ううん、ちがうよ。さえちゃんには上手になつてもらいたいんだよ。^③ 期待してるの、先生は。発表会でうまく弾けるようつて」

「ちがう。絶対にちがうよ。ねえ、みどりちゃん、ほんとにそんなんじゃないんだよ」

「ううん、お母さんも言つてた。あんたも頼^{たの}んで教えてもらいなさいって……」

そんなじゃないのに……どうして……。私はこのとき本当に、^④ すごい衝^{しょう}撃^{げき}を受けた。

みどりちゃんは、みどりちゃんの実力より少し上の^{※4}ランクの曲を発表会で弾く。それは、みどりちゃんならできると先生が確信したからで、補習をしないのは、そんな余計なことをしなくても、みどりちゃんはきちんと家で練習してきて、完璧に弾けるのがわかつているから。

それなのに、なんでなんだろう。うらやましいなんて。人によつてこんなに受けとめ方がちがうなんて。それはとても怖いことで、私はその日みどりちゃんに言われたことが、頭から離れなかった。自分がこうだと思つていたことが、ほかの人にとつてはまったく別の意味を持つ。怖いと思つた。ものすごい恐怖だった。

みどりちゃんも、今月でレッスンをやめる。私は火曜日のレッスンがなくなり、課題を与えられなくなったことで、これからはもうピアノを弾かなくなるだろう。でも、みどりちゃんはレッスンをやめたあとも、ずっとピアノを弾き続けることだろう。自分ですすんで譜面ふめんを買ってきて、それができるようになるまで何度も練習をするだろう。

発表会当日、私は自信のなさのために、少しばかりテンポを速く弾きすぎてしまったけれど、それ以外はけっこううまくできた。先生もほっとした様子で、笑顔を見せてくれた。

でも、練習では完璧だったみどりちゃんが、本番で二回もミスってしまったのだ。みどりちゃんはそれでも堂々としていたけど、心の中ではきつと残念に思っていたと思う。

それとも、私に対して「 」⑤「 」と思っていたのかもしれない。そう考えると

悲しかったけど、終わってから「ほっとしたね!」と なんのふくみもない 晴れ晴れとした笑顔で言われて、私はそんなふうに心地悪く思ってしまった自分を呪った。

先生は、おどりのみどりちゃんのまさかのミスに⑤ **B** をしかめていて、私は「本当に大人は余計なことをする」と補習のことを思い、「だからこんなことになる」と少し残酷な気持ちで先生のゆがんだ顔を遠くから眺めていたのだった。ピアノを最初に習いたいと言いついたのは自分だった。先にお姉ちゃんが習っていて、それはとてもたのしそうで気持ちよさそうで、私はお母さんにおねだりして、二年生のときからピアノを習いはじめた。

「さえは、本当に飽きっぽいわね……」

「……別にいいじゃん」

何も言いかえせない自分を、私がいちばんよく知っていた。私は本当に飽きっぽいのだ。なんでもすぐに手を出すくせに、あつというまにやめてしまう。そろばんもスイミングも。

ある程度できるまでは一生懸命やるけれど、なんとなくできるようになると、もうなんだかどうでもよくなってしまうのだ。

私はピアノのある部屋に行つて、お姉ちゃんの軽やかな指先を見つめた。高校一年のお姉ちゃんは、私よりも背が低い。私の身長は去年の夏、驚くべきスピードでぐんと伸びて（夜寝ていて、背骨が伸びる音がきこえたくらいだ）あつというまにお姉ちゃんを追いこした。

「何よ、あんたも弾くの？」

「ううん、ねえ、もう一回弾いて。今のやつ」

お姉ちゃんおねえちゃんは、右の眉毛まゆげをちよつとだけ持ちあげてから、いいわよと言って姿勢を正し、きちんと座すわり直した。たたたたーん、たたたたーん、

たたたたた、 たたたた、 たたたた、 たたたた、
じやーんじやじやじやじや、 じやーじやららんらん。
丸くて赤ちゃんのようにもちもちとしたお姉ちゃんの小さな手は、

丸くて赤ちゃんのようにもちもちとしたお姉ちゃんの小さな手は、あっちに行ったりこっちに来たりして軽快に動く。私の目は釘づけで、すごいなあとただそれだけ思う。

だって、お姉ちゃんの紅葉もみじみたいな手は、一オクターブ届くか届かないかのぎりぎりの大きさしかないのだ。それなのに

だって、お姉ちゃんの紅葉みたいな手は、一オクターブ届くか届かないかのぎりぎりの大きさしかないのだ。それなのにこんなに鍵盤が離れている和音っぱいの曲を、簡単に弾いてしまう。

私の指はお姉ちゃんよりうんと長いし、一オクターブ以上（ドから次のレまで）軽く届く。初めてのレッスンのときに、

私の指はお姉ちゃんよりうんと長いし、一オクターブ以上（ドから次のレまで）軽く届く。初めてのレッスンのときに、「この子は将来、必ず私よりうまくなります」と、先生に言わせたほどの指なのだ。

それなのに、私にこの曲は弾けない。技術的にはもちろんだけど、そうじゃなくてほかの何か。なんて言えばいいのかわからないけど、私には絶対弾けないのだ、きつと、一生。

③ お姉ちゃんはピアノを弾くときだけ指がすつと長くなるし、私はピアノを弾くときだけ指が縮こまる。つまりは、そういうことだ。そういうことが、世の中には案外と存在するのだ。
私はそのことにたった今気づいた気がして、そしてそれを意外にもすんなりと納得している自分に、ちよつぴりがつかり
したのであった。

(椰月 美智子 作『十二歳』より)

- ※1 オール木成…… さえが通う小学校のポートボールの代表チーム。さえとみどりは、六年生になってこの
チームに選ばれた。
- ※2 やさお…… オール木成の顧問兼コーチを務める先生のあだ名。「やさおとこ(優男)」の略。
- ※3 イコール…… 同じこと。等しいこと。
- ※4 ランク…… 順位。等級。

問一 ~~~~~ a ~ d の語句の意味として最も適当なものを、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えな
さい。

a 「拍子抜け」

- ア あこが外れるくらいびつくりすること
イ 勢いこんでいたものが気がぬけること
ウ 期待を裏切られてしょんぼりすること
エ 支えを失い立っていられなくなる事

b 「案の定」

- ア すべては定まった運命によるということ
イ そうなるとわかつてはいても残念なこと
ウ まったく予想しなかった結果になること
エ 物事がすべて自分の予想通りに進むこと

c 「なんのふくみもない」

- ア まったく意味のない
イ まったく悪意のない
ウ まったく配慮のない
エ まったく理由のない

d 「おとり」

- ア 演し物の順番が最後であること
イ まごついて大失敗をやらかすこと
ウ 技量が完璧で非の打ち所がないこと
エ 何かを誘い出すために利用されること

問二 ——— ① 「ためになる『何か』」とありますが、これはどのようなものかと言っているのだと思いますか。

「くためになる『何か』。」という語句につながるように、五字以上十字以内で答えなさい。

問三 ——— ② 「同情とも哀れみとも□□□□」の「□□□□」にひらがな四字を入れて、適当な慣用表現を完成させな
さい。

問四 A・B にそれぞれ漢字一字を入れ、適当な慣用表現を完成させなさい。

問五 ——— ③「期待してるの、先生は。」とありますが、ここに見られる表現技法として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 擬人 ぎじん イ 省略 しょうりゃく ウ 対句 たいく エ 倒置 たうち

問六 ——— ④「私はこのとき本当に、すごい衝撃を受けた」とありますが、このときの「すごい衝撃」の内容の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生が自分に期待しているはずなどないのに、それをみどりちゃんにどうしてもわかってもらうことができないもどかしさ。

イ 自分が絶対にこうだと思っていたことが、他人にはまったく別なように受けとめられてしまうことのおそろしさ。
ウ 自らすすんでピアノを練習するみどりちゃんに比べて、決してそうすることのない幼い自分に対するはずかしさ。
エ 自分よりはるかに難しいランクの曲を弾きこなすみどりちゃんが、実は少しも自信を持っていないことに気づいたおどろき。

問七 ⑤ に入る「みどりちゃん」の気持ちを表した文として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア やっぱり、さえちゃんは私なんかより才能があるんだわ。私はどんなにがんばったって結局うまく弾けない
イ ああ、こんな難しい曲を弾こうとしなければよかった。私もさえちゃんみたいに簡単な曲を選べばよかったわ
ウ ほらね、さえちゃんは補習をしたから上手に弾けたでしょ。私は教えてもらえなかったからまちがえて当然なの
エ どうして、なまけ者のさえちゃんは今うまく弾けたのに。これじゃあ一生懸命練習した私がばかみたいじゃないの

問八 ——— ⑥「少し残酷な気持ち」とありますが、その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生はみどりちゃんのミスにいやな思いをしているが、私は先生には「余計なこと」をした落ち度があると考えているので、それも多少いい気味だからいいの気持ちでいるということ。

イ 先生はみどりちゃんのまさかのミスにがっかりしているが、それはもともと先生自身のまいた種であり、大人のくせにダメな人もいるものだと思暗い気持ちでいるということ。

ウ 先生はいつまでもたっても上達しない私にあきれかえり、みどりちゃんならできると確信していたのに、それが反対の結果に終わったので、悪いとは思いつつもうれしい気持ちでいるということ。

エ 先生はみどりちゃんの成功は確信し、私にだけ不安を感じて補習をしたが、結局自分の方がピアノは上手だったのだと、みどりちゃんに対して優越を感じる気持ちでいるということ。

問九 ——— ⑦「右の眉毛をちょっとだけ持ちあげて」とありますが、このときの「お姉ちゃん」の気持ちを十字以内で説明しなさい。句読点は必要ありません。

問十 ——— ⑧「そういうことだ」とありますが、ここで「さえ」が「そういうこと」と言っている内容は、結局どのようなことだと考えられますか。自分の言葉でわかりやすく説明しなさい。

[illegible][illegible]

氏名

受 験 番 号

得	点
*	